

風の子

五十嵐靖晃

URAYASU  
ART PROJECT  
〈浦安藝大〉



「風の子」は、2023年に開催した浦安アートプロジェクト「浦安藝大」において、アーティストの五十嵐靖晃が展開したプロジェクトです。

浦安市内の子どもたちを中心として、有志の方々や市内の小学校等の協力により実施されました。

## 「風の子」が空を舞う

2023年10月、総合公園の海沿いに、660個の「風の子」が空を舞いました。小さな吹き流しである「風の子」は、市内各地の子どもたちの手によってつくられました。子どもは風の子といわれます。5つのエリア(元町地域、中町地域、新町地域、工業ゾーン、アーバンリゾートゾーン)で街の風景が異なる浦安において、子どもたちは風のように、境界を超えて遊びまわります。子どもたちは、自分たちが作った「風の子」と日常を過ごし遊ぶことで、かつて海であった埋立地に吹く風を可視

化し、今も昔も土地の境界関係なく吹き続ける風を感じていきます。それぞれが浦安の風を体感したあと、約束の日に「風の子」を携えて、自らが風となって総合公園に集合します。海の風景とともに展示された作品をとおして、それぞれの風に思いを馳せ、色々な人や風景を繋いでいくことを目指します。生活圏が異なることによる境界をつなぎ、子どもたちによって市内の風通しをよくするという願いが込められています。



## 「風の子」をつくるワークショップ

浦安に吹く風を感じる「吹き流し=風の子」をつくるワークショップを、市内の子どもたちに向けて開催しました。ワークショップ会場は海面埋立事業前からあった元町地域にある当代島公民館からはじまり、埋め立てにより新しく誕生した中町地域にある市民プラザ、新町地域にある高洲公民館へと移っていききました。また、東小学校、高洲北小学校、明海南小学校地区児童育成クラブ、美浜北小学校地区児童育成クラブでのワークショップも行いました。子どもたちはアーティスト

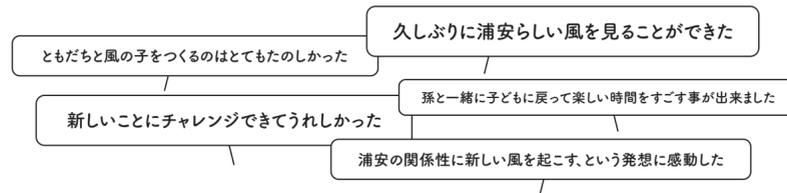
トと出会い、風の子をつくることで、それまで意識していなかった風を身近に感じるようになりました。また、子どもから大人へと思考が切り替わる時期である小学生が、育ったまちの風景や文化的な背景の違いを超えて、ともに作り、遊んだ思い出を心に刻みました。多くの浦安の子どもたち、そしてこれから生まれてくる未来の子どもたちに向け、10年、100年と続く事業になって欲しいと願って取り組みました。

## 活動報告

市内全ての小学生を対象にチラシを配布し、多くの親子に参加してもらいました。申込制のワークショップ10回と小学校、児童育成クラスでのワークショップを以下のとおり実施しました。10月22日(日)には、総合公園での作品設置作業を行い、ワークショップで制作した「風の子」を持参した多くの子どもたちと再会することができました。また、当日は公開ワークショップを行い、総合公園を利用する人々にも「風の子」制作を体験してもらいました。(総参加者数:462名)

開催日	時間	場所
8/7(月)	午前の部 10:00~11:30 / 午後の部 13:00~14:30	当代島公民館
8/22(火)	午前の部 10:00~11:30 / 午後の部 13:00~14:30	市民プラザ Wave101
8/23(水)	午前の部 10:00~11:30 / 午後の部 13:00~14:30	市民プラザ Wave101
8/29(火)	13:00~14:30	明海南小学校地区児童育成クラブ
9/2(土)	午前の部 10:00~11:30 / 午後の部 13:00~14:30	高洲公民館
9/3(日)	午前の部 10:00~11:30 / 午後の部 13:00~14:30	高洲公民館
9/13(水)	3限目 10:35~11:20 / 4限目 11:30~12:15 / 5限目 13:45~14:30	東小学校(2年生)
10/11(水)	2限目 9:25~10:10	高洲北小学校(1年生)
10/11(水)	15:30~17:00	美浜北小学校地区児童育成クラブ
10/22(日)	13:00~16:00	総合公園

## 参加者の声



### 子どもの声

[8/7(月)@当代島公民館] 話しながら楽しくやりました。新しいことにチャレンジできてうれしかったです。(4年生) / けこうむずかしいこともあったけどそれが楽しかった。またいろんな工作をやりたいです!(3年生) / と子どもと風の子をつくるのはとても楽しかった。(2年生) / 簡単に作れて教えて下さる方がとてもやさしく、すばらしいものがつくれて、めっちゃよかった!!(6年生)

[8/22(火)@市民プラザWave101] 切りこんだ深さと切った数の違いによって風の子の動きが変わるのが面白かった。(5年生) / 風の子が気に入った。(1年生)

[8/23(水)@市民プラザWave101] つくってみたいのしかったです。またつくりたいです。(2年生) / すそをはきまてかるところがとてもよかったです。(2年生) / みんなで楽しく出来ました。楽しいという気持ちでできました。(4年生) / むずかしいところもあったけどわからないのがなくて

ました。きるのをせめてくふうしたりいっぱいいろんなことをしてとても楽しかったです。写真もとったりあそびもしたとてもおもしろくて、また来年するならばまたまたさかしたいです。(5年生)

[9/2(土)@高洲公民館] よくとんでたのしかったです。(1年生) / 風は神様ということ、意見をきけてとてもおもしろかったです。これから風は神様ということをおぼろげにしたいです。(5年生) / つくったあとに風の子を風にあててみた時、おもしろい動き方をしました。(3年生) / いろんなはっけんがあったのがおもしろかった。(2年生)

[9/3(日)@高洲公民館] 色々工夫して完成させるのがたのしかったです。切込みでうごきが変わるのがおもしろいと思いました。(5年生) / 工作を家であまりやらないので機会があったら久しぶりだと感じました。(5年生) / じぶんのかぜのこをつづいていろいろなクニックをまなべた。(4年生) / かげのことさぼできる。(1年生)

### 保護者の声

子どもと一緒に参加でき考えながら楽しむことができ良い経験ができました。ありがとうございました。 / 孫と一緒に参加出来久しぶりに子どもに戻って楽しい時間をすごす事が出来ました。ありがとうございました。 / 難しかったのですが、大人も一生懸命になっていました。子どもが夢中になって楽しんでいました。 / シンプルでわかりやすく、子どもがデザインしやすくてのしめました。 / パワーリップの素材や、神様の話も興味深かったです。 / 以前、ペットボトルで吹き流しを制作したことがあったのですが今回のこの素材や、作り方がはるかに優れていることも参考になりました。 / それぞれ個性があるものができあがってよかった。作って終わりじゃなく、10月にまた再開するわくわくもあって楽しかったです。 / 風の子を作る中で

子どもとの会話や町の歴史を楽しんだりいつも意識していない風を感じる事ができた。 / 風の子を作る→暮らす→また集うの流れがおもしろいと思った。 / 少しずついいないうちから形あるものを作ること楽しかった。みんなで持ちよってどんな事になるのか見てみたい。できた風の子がシラシラさらさら音のするおもしろいと思った。 / 作るのも作るものどらすというおもしろかったです。小1には少し難し形が見えてくるまでに飽きてしまいましたが、できあがった風の子に愛着がわいたようです。 / 緊張感あまりなくリラックスモードでできた。針を使った手先を使う作業が子どもにとってもいいと思った。 / 神様のお話し、とても興味深かったです。新町にもきっと神様はいるのでは!と思いました。

### 展示を見た人の声

海と生活が密接な関係だった浦安は、かつて風のまちだった。それを、アーティストが短い期間で見出してくれたことが嬉しい。久しぶりに、浦安らしい風を見ることができた。(男性 / 70代) / 風が強いというのは、浦安の生活の中で感じることはあった。その風と子どもたちをつなぐことで、浦安の関係性に新しい風を起こす、という発想に感動した。(女性 / 30代) / 浦安に住んでいても、海沿いまで来ることがなかった。こんなに素敵な風景を持つ公園があることに驚いた。この場所に連れてきてくれた「風の子」に感謝したい。(バスツアー参加者女性 / 70代) / 「風の子」の

壮大なストーリーがすごい。つくられた土地だからこそ、子どもたちと一緒に新しい未来をつくって行きたいと改めて思った。この取り組みが、どんな形でも続いているら面白いと思う。(男性 / 50代) / 浦安でこんなことが起こっているなんて知らなかった。もっと早く知っていたら、参加したかった。埋立地ということ意識して暮らすことはあまりなかった。埋立地にもアイデンティティがあって、神様がいるという考えにはあった。(夫婦 / 40代)



## 「風の子のある風景」をともにつくる

まちなか展示を終えた「風の子」の1つ1つのシワを伸ばし、形を整えて箱に入れ、作品倉庫に収めた。1つ1つの形の違いは一人一人と向き合っているかのようだった。15日間、浦安の風を捉えていたからだろう、当初の透明感のある白から若干干渉がかった、少したびたびたような印象になっていた。その数、約300個。残りの約300個はつり手の白と揃っていた。みんな各自のつくった(風の子)に愛着を持って扱っていたから、きつと今度は家で大事に飾ってくれるに違いない。

6月のリサーチからはじまり、7月にプラン決定、8月・9月・10月で10回のワークショップとプラスアルファで臨時ワークショップも開催。そして展示。約半年を走りることができたのは、たくさんの関係者や参加者と出会い、協働があったからである。アートプロジェクトは生き物のようで、出会いと協働を通じて、変化と成長を遂げていく1つの物語なのだ。誰一人欠けてもあそこにはたどり着けない。その成果として総合公園に丘巻の風景が出来上がった。市内各地の子どもたちの手によって、それぞれの場所で作られた660個の「風の子」が集い、それがなががり、幅112m×高さ2mの1つの巨大な作品となり、浦安の風を捉え、空を舞った。設置日は飛び入り参加での



展示会場となった総合公園は、天気の良い週末は多くの人が訪れ、思い思いの時間を過ごす中、「風の子」と出会い、ゆっくりと風の流れを追いかけ、平日は散歩やランニングコースということもあり、常に人が行き交い、ほんとうにたくさんの方が「風の子」を通じて、目には見えない「風とのかかわり」を意識する姿があった。

「風の子のある風景」をともにつくる地元の方たちからは、「次にやるときには事前に声がけして、もっとたくさんの人に聞かせてほしい」「展示の時に両サイド1つずつ空けると風に対して安定して綺麗に見えるから、次はもう少し」「(風の子)をきっかけに浦安を故郷として、愛着を持って子どもたちに育ってほしい」「浦安の年中行事として続けていきたい」など、次へとか向かうような言葉がもたらした。

人がイメージをもってどこかに向かっている時が一番楽しい。

話をしてくれた方たちは「浦安をもっとこうしたい」「ああなりたいのにな」という思いを持っている。この思い、イメージが未来をつくるのだ。未来は常に不確定だ。だからこそイメージが必要で、イメージには心の動き、感動が不可欠だ。そして「アートは人の心を動かすこと」こそ本質がある。

「風の子」が、メディア、世代、立場など、さまざまな境界を超え、浦安の風を捉え、そこに暮らすたくさんの一人一人の心を再び動かす日がくるのを楽しみにしている。

五十嵐靖晃

### 五十嵐靖晃(いがらし やすあき)

千葉県市川市出身。東京藝術大学大学院修士課程修了。人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然と美しく接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。アートとは自然人間の関わり方の術であり、この時代、多様な人々をつなげるものとしてあると考える。代表的なプロジェクトは、「くすかき」(福岡県 / 太宰府天満宮 / 2010-)、「そらあひ」(瀬戸内国際芸術祭2013・2016・2019)、「雲結い」(北アルプス国際芸術祭2017)、「時を束ねる」(南極ビエンナーレ2017)、「海渡り」(熊本県 / 乃木美術館 / 2021-)など。

自身も埋立地で生まれ育ち、現在も千葉県市川市に暮らす五十嵐靖晃は、埋立地特有の思いや記憶と向き合ってきた。これまで20年以上にわたり、国内外の壮大な自然の中で作品をつくり続けてきた五十嵐は「人工的な地域で育ったことの反動だったのかもれない」と語っています。多くの経験をしながら、埋立地とそこで生きる人々について考察します。人工的に開発された地域であっても、たくさんの自然が確かに存在し、それらに宿る神様や信仰も存在していると考えています。新しい地域だからこそ生まれる、住む人たちの思いや願いにスポットをあて、市民のみならずとも、浦安の、埋立地の神様について考えをげます。